

アブグレイブ刑務所の写真 - 触れない暴力あるいは非人間化の装置

村上 由鶴 (東京工業大学)

アブグレイブ刑務所の捕虜虐待写真は、2003年に始まったイラク戦争下で、米軍兵士がイラク人の捕虜を収容していた刑務所で行った虐待の様子を撮影したものである。頭巾を被せられた囚人や重なり合う裸体等、凄惨な虐待の様子を示す写真は、世間の嫌悪感を掻き立てるものであった。

たしかに、このような暴力の写真は繰り返し撮影されてきた。1900年代初頭の黒人リンチ事件を写した写真などはその一例である。例えば、アラン・セクーラは「The Body and the Archive」(1986)において、先住民族、奴隷、性的マイノリティを写した映像が、負の歴史の集積としての「シャドウ・アーカイブ」を無意識に作ってきたことを指摘している。しかし、アブグレイブの写真は、意識的に被写体の人物をシャドウ・アーカイブに組み込んだ事例であり、そのうえ記録目的ではなく拷問の手段として用いられたものである。そして、この写真が他と決定的に異質なのは、虐待される囚人と共に兵士たちが写り込み、レンズに向かって笑みを浮かべているということである。

本発表は、アブグレイブの写真において「なぜ、兵士たちは写真に写っているのか」という問いを軸として、一般的な写真の撮影・流通・鑑賞を経験する人間が写真によって態度や意識を変容させられる可能性を示すことを目的とする。

写真の普及により経済的・社会的・文化的に写真の有用性が高まる一方で、写真・映像を通じた暴力、迷惑行為は社会問題にもなっている。そうした場面では、ある人にとってその存在自体が脅威となる写真が非接触型の暴力として機能する例が見られる。そこで本研究では、写真が「触れない暴力」として機能するとき、写真は人間的な理性や共感、そして尊厳を奪う「非人間化」の装置としての作用を持つことを指摘する。

従って本発表の構成はまず写真の経験における「非人間化」の概念を整理するためにエリザベス・エドワーズらの『Anthropology and Photography 1860-1920』(1992)やジョン・タッグの「Evidence, truth and order」(1999)等の議論を振り返る。次に、アブグレイブ刑務所で撮影された写真を中心に、被害者と加害者による写真の経験に検討を加える。結論として、写真という装置が持つ「扇情性」によって、中動的な振る舞いとしての「写真への奉仕」が行われ、人間の抱える非人間的な一面が作動することを指摘する。

これまでの写真研究では、主に具体的な作品や作家、ジャンル、あるいはヴァナキュラーな写真等に関する研究も行われてきたがいずれも表象の分析が中心であった。本発表は、なぜ写真は暴力的に機能するのか、そのとき人間が写真とどのように関係を結ぶ

のかを検討する研究の一環として、アブグレイブの写真を事例に、「経験としての写真」論の提起を試みる。